

知床半島ヒグマ保護管理方針検討会議の結果報告・今後の予定

1 結果報告

(1) 会議等の開催経過

○知床半島ヒグマ保護管理方針検討会議を開催した。

第1回：平成28年6月10日（金） 札幌

第2回：平成28年9月15日（木） 札幌

第3回：平成29年1月19日（木） 札幌

○関係3町にて住民説明会を開催し、計74名が参加した。

平成28年12月4日（日） 標津町 36名

12月5日（月） 羅臼町 9名

12月6日（火） 斜里町ウトロ 29名

<参加者からの意見・質問（抜粋）>

- ・ クマに対する対応が厳しくなったゾーン3は羅臼町には少ない。市街地への出没を半減させるという目標を達成するためによい方策はあるか。
- ・ 遺産隣接地域のウトロ東はゾーン3となっているが、ヒグマ出没が頻発する場所であり、ゾーン4に変更できないか。
- ・ 大量出没は餌資源の不足が原因と考えられるが、そういった際に管理者がとれる対策はないのか。大量出没は自然なことなのか、或いは何らかの変化が生じているのか、科学委員会などではそういった究明を目指しているのか。

(2) 知床半島ヒグマ管理計画のポイント

- ・ 北海道が策定する第二種特定鳥獣管理計画「北海道ヒグマ管理計画」の地域計画として位置づけるとともに、「知床世界自然遺産地域管理計画」等と連携を図ることを明記。このため、名称を「保護管理方針」から「管理計画」に変更。
- ・ これまでオブザーバー的な位置づけであった標津町も正式に参画し、知床半島（斜里町・羅臼町・標津町）の遺産地域及び隣接地域において一体的な管理を行う。
- ・ 保護管理方針の総括を踏まえ、計画の目標を中長期目標と短期目標に分けて再編。中長期目標としては「人為的な死亡総数を個体群が持続可能な数字に維持」や「人間側の問題行動に起因する危険事例をゼロ」等を、短期目標としては「メスヒグマの人為的な死亡総数の目安を75頭以下」や「ヒグマによる人身事故をゼロ」、「人間側の問題行動に起因する危険事例を半減」、「市街地への出没を半減」、「農業被害を3割削減」等を掲げた。
- ・ メスヒグマの人為的な死亡数の上限については、生息数推定結果をもとに 75頭という目安を設定した。ヒグマの個体群動態については、今後、管理計画期間中にデータ収集、精度向上を行うことを目指す。
- ・ 過去5年間の課題として人間側の問題行動が指摘されたため、人間側に対する対策を強化した。具体的には、利用者や地域住民による問題行動とそれがもたらす悪影響、

それに対する管理者の対応を明示した。また、利用者や地域住民に求められる行動も明示した。これらに係る情報発信等に取り組むことで、ヒグマ対策に関する意識の向上や行動の適正化を図る。

- 人間側の対策強化の一環として、対策の基準となるゾーニングを再編した。利用者の往来が多く、かつヒグマ対策に制約を受ける地域を「特定管理地」として再編し、個別地区の特性や利用の実態に応じて利用者側の制御を主とした対応を行う。
- 過去5年間の課題として指摘された極度に人慣れが進んだ個体への対策として、対策の基準となる行動段階を再編した。行動段階1の中でも行動に改善が見られない個体は行動段階1+として再編し、人が居住する隣接地域等においては捕獲も検討することとした。
- 目標の達成状況を適切に評価・検証するため、モニタリング項目を再編した。また、計画を確実かつ計画的に実施するため、毎年アクションプランを策定することとした。
- モニタリング項目の他にも、ヒグマの適正管理に必要な調査・研究を整理し、関係行政機関、学識経験者及び地域団体等が連携して情報収集及び調査・研究に努めることとした。
- 保護管理方針において科学的知見に基づく対策実施の観点が不足していたことを踏まえ、関係行政機関で開催する「知床ヒグマ対策連絡会議」、科学委の下に設置する「エゾシカ・ヒグマWG」（仮称）において計画の実施状況や目標の達成状況を評価・検証することとした。

2 今後の予定

(1) 管理計画の改定

今回科学委での議論を踏まえ確定し、平成29年4月から新計画の運用を開始する。

(2) 管理計画の進め方

年に2回程度開催する「エゾシカ・ヒグマWG」（仮称）において、科学的な評価及び助言を得ながら取組を進める。

また、関係行政機関で年に1回程度開催する「知床ヒグマ対策連絡協議会」において、現場の対策について情報共有を行いながら取組を進める。